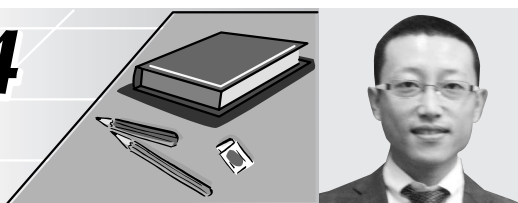


学生時代と図書館 74

— ひねくれ者の告白 —

筒井 友弥



素直に、告白しよう。

学部生時代、私が図書館に赴いたのは2、3回程度である。そもそも、図書を借りたことはあったのだろうか。

幼い頃からひねくれ者だった私は、図書館はがり勉の行く所と決めつけて、まるで反抗期でもあるかのように、意図して図書館という場所から身を遠ざけた。この独りよがりの反抗は、修士課程での留学中にまで及び、ドイツ・マンハイム大学の大学図書館をはじめ、中心街にある市立図書館にも、あるいは、ドイツ語学を学ぶうえで欠くことのできないドイツ語学研究所附属図書館にさえ、片手で数えられる程しか足を運ばなかった。日本でもドイツでも、本は借りるより買うばかりで、これほど経済的に負担が重く、質、量ともに限界のある手段に固執する理由がどこにあったのか、今となっては不思議でならない。その後、博士課程に進学するとさすがに本を借りることは多々あったが、やはり、館内の静まり返る空間でひとり勉強することはなかった。

博士課程2年目の夏、再びドイツに留学した。ドイツ南西部の大学町テュービンゲンは、ヘルダーリンやヘッセなど、多くの詩人や作家が青春時代を過ごしたことで有名である。ネッカー川の川辺には、ヘルダーリンが半生を送ったヘルダーリンの塔が建ち、塔の窓からは、川の中州に伸びるプラタナスの並木道を臨める。仲春から初秋にかけて川面には棹舟が浮かび、舟は並木道沿いを滑って、通学路であったエーバーハルト橋の下をくぐる。中古で買った自転車で橋の袂を疾走し、町に点在する大学のなかで、プレヒトパウと呼ばれる近代文学・語学部の建物へ向かう。

留学当初、大学のゼミでグループ発表が課された。その日に、学生たちと発表の打ち合わせが組まれ、場所はプレヒトパウの図書館に決まった。グループ作業とあれば、個人がひねくれている場合ではない。それに、ひねくれ者は頑固者ではな

い。信念をもって意地を張る頑固者と違い、単に意地を張っているだけのひねくれ者は、自分さえ納得すれば、状況次第でころっと手の平を返す。ひねくれ者は、だからこそひねくれている。

シーンと静まり返った苦手の空間で、それでも、どうにか与えられた課題に取り組んだ。そのうち、要領の悪い私を見兼ねてあちこちに学生が散らばり、戻ってきては適切な文献を差し出した。作業は小一時間で終了。それまでに味わったことのない達成感と、どこからか湧いてくる悔しさ。その翌日から、時間があれば図書館に赴いた。思い込みの激しい者ほど極端な行動をとるというが、私はその典型である。とはいえ、その思い込みがプラスに働くと、私は水を得た魚になる。キーキーと泣く中古の自転車を漕いで、遠くにヘルダーリンの塔、眼下に並木道と棹舟を眺め、充実した留学生活に胸躍らせながら図書館に通い詰めた。途中で、絶品のチョコマフィンを買って、毎日毎日、閉館時間まで引きこもった。宿題、レポート、論文。欲しい文献はすぐに見つかる。知りたいことが次々とわかる。解く楽しみ。創り出す喜び。まわりの誰にも何事にも邪魔されない。いまや静まり返る空間が心地よく、勉強したいという気持ちが掻き立てられる。空腹さえ忘れるほど時間の経過が惜しい。完全なる食わず嫌い。あまりに遅い「図書館デビュー」。勝手な決めつけから意地を張り、図書館で勉強することを格好悪いと思いついていたそれまでの自分を悔いた。図書館で勉強している自分を見られ、同類たちに「お前もがり勉だよ」と告げられることを恐れていただけかもしれない。しかし今は、図書館ほど有意義で興味深い場所も少ないと思っている。情報や知識の宝庫であるだけではない。自己を見出す最良の場所でもあると。

素直に、告白しよう。私はがり勉である。

つつい ともや（講師・ドイツ語学）